

清国教育視察団と牧口常三郎

高 橋 強

1. 中国人留学生教育と牧口

牧口常三郎は、1904年2月から1907年4月まで、中国人留学生の為の学校である弘文学院（1902年－1909年、東京高等師範学校校長の嘉納治五郎により設立）で地理学（牧口著『人生地理学』に基づいて）を担当していた。聴講した江蘇師範生は、同講義の内容は教科書として有益であると判断して中国語に翻訳し、帰国後に『江蘇師範講義 地理 第7編』（1906年4月発行 発行所 江蘇寧属学務処 江蘇蘇属学務処）を出版している⁽¹⁾。

牧口が著した『人生地理学』（1903年10月）は、国内ばかりでなく、当時の中国人留学生からも大変に注目され、浙江省出身の留学生が発刊した雑誌「浙江潮」第9期（1903年11月）と同雑誌第10期（1903年12月）に「植物与人生之関係」「地人学」として部分訳が掲載された。1907年には青島にあった世界語言文字研究会が翻訳し『最新人生地理学』として、上海で群益書局から出版されている⁽²⁾。更に1909年には、弘文学院に学んだことのある凌廷輝訳の『人生地理学』が上海新学会から出版された。

当時牧口は、弘文学院で中国人留学生への教育に従事する一方、東京高等師範学校同窓会である「茗溪会」にて書記として同会発行の雑誌「教育」の発行兼編集の仕事にも従事していた（1903年11月－1906年11月）。更に1905年5月には「大日本高等女学会」を設立し、大日本高等女学会の幹事兼講師（外国地理担当）にも就任している。

このように牧口は正に、留学生教育や女子教育も含めた日本の教育の最前線に身を置いていた。そのような牧口にとって、日本の教育事情を視察に来た清国教育視察団との懇談は、大変意義深いものになったと思われる。多くの視察団の中で、牧口が交流した1906年の提学使（地方教育行政長官）一行16名の訪日は特筆に値すると言われる。一行は、張之洞の娘婿で湖北省提学使の黃紹箕を団長とし、1906年8月から11月にかけて東京に滞在、文部省や各地の学校を歴訪して教育行政や学校運営の実務を視察する一方、各種の講義を受けたり、日本側専門家との間で意見交換をするなど活発に活動している。提学使一行の日本教育視察は、中国の地方教育振興に大きな影響を与えた⁽³⁾。

2. 清国教育視察団と牧口

1906年10月11日一ツ橋外学士会にて、「教育界」（当時、代表的な教育雑誌の一つ）主催の第20回教育茶話会が開催された。同会には、提学使一行も参加し、一種異彩を添えた内容となったと記録があるが、牧口常三郎も雑誌「教育」の記者として出席していた。記録によると牧口は、1905年3月の同第2回教育茶話会から出席し、論議に加わっている。

当日の参加者名簿は、次の通りである。

黄	紹 箕	大清国二品 湖北提学使
呉	慶 岷	大清国湖南提学使
李	翰 芬	大清国広西提学使
杜	彤	大清国新疆提学使
葉	爾 愷	大清国雲南提学使
劉	廷 琛	大清国陝西提学使
憑	関 模	通訳東京帝国大学法科大学在学生
程	明 超	通訳京都帝国大学法科大学在学生
黄	曾	通訳
陶	山 斌二朗	愛媛県八幡濱商業学校長
小	谷 栗 村	文学士
石	川 半 山	東京毎日新聞主幹
森	次太郎	
吉	田 卯之助	国民新聞記者
石	井 波 平	文学士
加	藤 駒 二	
渡	部 萬 蔵	東京朝日新聞記者
佐	々 醒 雪	文学士
曾	根 金 川	
日下部	三之介	日本教育主筆
樋 口	勘治郎	
桐 谷	文 平	
牧 口	常三郎	
直 井	潔	
松 田	茂	東京市小川女子小学校長

当日の懇談内容は、以下の通りである⁽⁴⁾。

午後6時、一同席につくと、幹事の曾根金川君が開会の挨拶と、提学使一行に対する歓迎の辞を述べられ、次に松田君の演説を紹介せられた。

松田茂君

「(略) 当市には女子の小学校もあれば男子の小学校もあり、男女混合の小学校も多数を占めて居ります。(略) これを徳育知育体育の三に区別して申して見ますれば、智育の例では、第一に女兒は思考作用が極端に欠乏して居ることであります。(略) 徳育の方で申しますれば、女子は一般に独立独行の気象がないために、少しの事件にも党を結んで暗闘を行ひ常に内部の秩序を乱して居ります。(略) 体育の方面を申しますれば、是は多言を費す迄もなく、第一に身体の姿勢が悪いこと、第二に健康状態が男子程にないこと、第三に体質が繊弱であつて疲れ易く犯され易いことは御承知の通りであります。(略)

さて、彼れ等を教育する所の教員はと申せば、日本従来の無意味なる慣例によって主に女子であります。所が女の教員は矢張り女の児童と同じ傾向と弊風とを以て居るのであります

から、如上の欠点は別に補はれたり除かれたりすることは、出来ません。(略) 此通りでありまして、彼等は男子によって教育されるといふことのお蔭で従来私の眼に映じた欠点を防ぐことが出来るやうになって居るといふことは一つの御参考になる事実であらうと思ひます。猶私は、朋友の感化が何れ程迄教育上に影響を及ぼすものであるかといふことを具体的に実験して居ります。(略) 要するに女と男とはもともと体質が違って居りますから、全然一致することは出来ませぬけれども、或る度合までは欧羅巴^{ヨーロッパ}の人のように男の考へることは女も考へ、又男に出来ることは女にも出来、女はよく男の相談相手にもなり、男の事業を補助すると云ふやうなことの出来得られないものでない、教育の結果に依て或る度合までは屹度^{きちつと}発達するものであると云ふことを私は深く信じて居るのであります。」

松田君の演説が済むと、一同食堂に入り卓を囲んで晚餐を共にして、暫らくは主客の間に種々なる談話が交換されておった。遽^{やが}て樋口君が起たれた。

樋口勘治郎君

「(略) 我々日本人は清国と唇齒輔車の関係を有つて居り、同文の国であり、過去に於いて色々親密に願つた上に今後も相携へて文明の道に進んで頂かなければならぬ国であつて、我々同胞が直接間接に清国に参つて御世話になった者もあり、今後も亦さう云ふ場合があるだらうと思ふに就いては、色々の意味に於いて歓迎を致すのであります。

此教育茶話会は、我々少数の有志が相集つて、教育の事をホンの茶話しに談じたり研究したり致しまして、幾分か世の中の為にもなるようなことを工夫し調査して行かうと云ふので集つて居りますが、教育のことは極めて世界的のものでありまして、日本の教育を考へるのは、同時に世界の教育を考へなければならない。他の国の教育のことを聴くことは自分の国の教育の為になる。(略) 提学使諸君は帝国教育会其の他の所に於て歓迎申上げて居りますが、尚ほ日本には教育の為の会が色々ある、此茶話会なども其の一つである、少数ではあるが極めて志を等しくする者が集つて、小さい会で無ければ、出来ない所の事を研究して居ることをお知らせ致したいのであります。(略)

我々の希望致しますことは、提学使諸君がお歸りになって、さうして此教育と云ふ何よりも大切なことにより、清国は旧い文明を以て居らるるお国であるが、此上に益々進歩させて、さうして我が邦と提携して西洋文明に拮抗するだけの東洋文明を開いて行くと云ふことに就て御尽力になることを希望致します。教育は外の事と違って、世の中がまだ需用しない所のものを此方から与える==人民が望まないものを強ひて教え込むと云ふやうな押売^{おしう}の性質がある所からして、社会一般から歓迎せられない傾向を免れないものでありますが、そう云ふ性質のものを国民に吹込むと云ふことは、余程むづかしいことで、諸君が有つて居らるる使命は随分重大で、さうして困難な事柄であらうと考へます。(略)」

樋口君が席に復さると、黄氏は一行を代表して起たれた。

黄紹箕君

「今晚は教育茶話会の非常の歓迎に対して、それから幹事及び松田さんから御演説^{うけたま}を承はりまして、且つ非常に自分達が教育茶話会会員諸君と一緒に晚餐をされたのは、自分達の^{うけたま}欣喜に堪へませぬことで茲^{ここ}に感謝を致します。

それから先刻幹事の仰^{おおせ}有る所では自分達に演説をせよと云ふことでありましたが、自分達は今晚別段演説は出来ませぬで非常に残念であります、併し演説をするのと、しないのととは随分他の批評にもなりますし、自分が此御国に参つて以来は一つの演説は致しませんでした、其原因の一つは自分が此御国に参つて些^{いささかも}共教育に関する経験がございませぬで

話し^{つま}教育家に関する演説は全^{まづ}く自分は出来ないのと、モウ一つは今迄^{まづ}我国の人は能く話が出来て^{おこない}行^いが出来ませぬ、それが我が支那の国民の弊^{へい}であります、自分達は未だ行ひはしませぬけれども、併し話も餘りしませぬ積りで、其の代り御国に参った以上は、自分の見たこと聞いたことで参考になる^だだけは本国に持って行って成るだけ実行する積りで決して此事だけ何う云ふ風に今度行ふとか何う云ふ風に行ひましたら支那の爲にならうとか云ふやうなことは私は申しませぬ、餘り過言すると今度行ひが出来ませぬ場合は甚だ残念の所でありますから……。

それから先刻幹事さんから自分共が日本に参つて色々な所を参観しましたが、夫^{それ}に何か感ずる所があれば一つ話して貰^{もら}ふと云ふことを承はりましたが、自分達は僅か2ヶ月餘りの短い時間の方々参観する、或は文部省で講義を拝聴するとか色々なことばかりで、先ず御国に参った以上は何處^{どこ}を見ても、何んな事を観察しても自分の敬服する所ばかりで、羨しいことばかりで感ずる所は極めて多くあります、だから夫^{それ}に関してお話をしたいことは山々ありますけれども、併し御国を参観に参りまして直ぐその事を今晚来会諸君に申すのは決して面白くないだらうと思ふ、それも今晚は其点の話は止めます。

今松田さんの女子小学校の経験談を承はりましたが、是は非常に自分の有益と思ふ所で、今度支那の女子教育に関する点には随分参考にならうと思ふ、今迄で女子高等女学校とか、色々な学校を拝見しましたが、それは学校の参観だけで未だそれに関する^{よく}ことで自分に有益なる話も沢山承はりませぬでありましたが、今晚だけは非常に自分が^{よく}欣んで拝聴しました。

教育会は随分永年設立して来まして、非常に御国の国家に貢献する所は少なくないと云ふことで折々御国の教育家から聴きました。成程御国の教育の発達に就ても此教育会の効能が確かに少なくない、御国に教育会があり、始めて御国の教育が発達して来た訳であると云ふことで、今度支那にも教育会を始める、それも中央政府及び地方から方々教育会を始める積りでありますが、それも何う云ふ成行きになるか夫^{わか}は分りませぬで、併し「教育会」の雑誌及び教育茶話会の会員諸君から非常の有益の話を与へられました、多分将来は力になるだらうと思ひます。全く日本に参りました以来は方々から歓迎されまして、教育会には二度目であります、此の間帝国教育会にも一度招かれまして非常に自分達の光榮と存じて居る所であります。

それから今晚食事の以後は幹事さんから^{にわか}緩^{ゆる}づくりの話の出来るやうに自分達に時を与えましたから、非常に自分も欣喜に堪へませぬ、それに就て教育会の益々隆盛になること、夫から教育茶話会会員の御健康を祝します。」(拍手)

黄氏の挨拶演説が済むと、一同は食堂を出で別室に移り、幹事は石川君を紹介した。

石川半山君

「(略)日本が露西亜に勝ちまして以来、世界の人が、何故に此小さな国が大きな強い露西亜に勝ったかと云ふことを驚いて居りまして、之が世界に於ける一つの問題になつて居る、吾々日本人の間でも亦一の問題にして居るのであります、(略)日本の今度の露西亜に勝ったと云ふ一つの主要なる原因は、矢張教育にあつたらうと思ひます(略)。

然らば日本の維新開国の後、殆ど四十年間に於て日本人は如何に教育制度を制定したか、(略)第一に此明治の初年に於て日本が義務教育と云ふことをやったのが最も偉大なることであります、(略)日本が此開国をなす以前には、貴方の御国の儒教が日本の世界を支配して居った、民は由らしむべし知らしむべからずと云ふ儒教の言葉が日本の政事の方針であつた、国民が愚かな方が治め易いと云ふ思想があつたが為めに、一般の国民に教育をしな

ったが、維新以後にどうしても国民に知識を与なければならぬ、教育の普及をしなければならぬと云ふことの方針が確立しました、『民の治め難きは国の幸福なり』と云ふ主義が国の根本となった、(略) 実に我が国の今日の発展の原動力となったと思います。(略)

第二に此日本の教育の維新以後に著しく変った点と云ふものは、実業教育に対する観念で有ります、維新以前は日本が利を賤しみ、実業を蔑視しましたが、之は矢張儒教の結果でございましたと思います、孟子が梁の恵王に見えた時に、王何ぞ必ずしも利を曰はん、唯仁義あるのみと言ふた、(略) 然るに維新以後西洋の文明が這入^{はい}って来て、アングロサクソンの思想が這入^{はい}って来て、富国の基たる商工業を奨励することになって来た、此に於て実利実益を尊重し、科学を尊重し、さうして実業教育を奨励することになり、(略) 則ち富国强兵の基は此教育上の変化にあると思ふ。

それから第三に特殊なる日本の教育上の変化とするものは音楽、美術の教育でありまして、音楽、美術は維新前は余り盛んでなかった、昔には音楽もあり、美術もあったけれども、儒教の渡来以後音楽美術は衰えた、音楽は儒教で鄭声と称して之を排斥する、(略) 維新以後は音楽美術は国民の思想を涵養し、国民の心を和らげ、非常に優美なる趣味の深い者で、国民の性格を養ふに必要であると云ふことに気が付いて、政府も力を尽したのであります(略)

(略) 維新以後の変化は先刻御話した三点であります、其の以前にまだ国を開かない前から這入^{はい}って居る所の兵術医術と云ふものが、今日非常に日本に盛んになって、それが今回の日露戦争の勝利を博した最大原因となったらうと思います。

(略) 貴国に於て第一に普通教育、第二に実業教育、第三に音楽美術教育、それから更に兵学医術の教育を十分に発達するように御実行あられんことを望みます。」

此の時、時間は既に9時に近づいておったので、幹事は提学使一行に向つて、諸君にして尚ほ御都合よくば、帝国大学早稲田大学の講師たる佐々文学士の演説を紹介し度いと思ひますが、貴意如何と問はれた。すると黄氏から、どうか高見を拝聴し度い、そして更に自分からも一言を弁じたいとの返答があつたので、佐々君は起つて次の演説をせられた。

佐々醒雪君

「(略)」

佐々君の演説が済むと、黄氏は再び起つて、ねんごろに数千言、石川佐々両君の意見に対して所懐を述べられた。

黄紹箕君

「先刻石川さんからのお話を承りましたが、日本の御国が露西亜と戦ひまして露西亜に勝つたと云ふ問題に就て各国人も調べ亦御国の人も随分考へましたが、其の原因はやはり御国の教育にある、日露戦争ばかりでなく今までの文明の発達もやはり教育に因つて来たと云ふことをお話して下さいましたが、日本は普通教育、実業教育、音楽美術教育から色々の方面に総て発達して来た訳けで支那にも其の三つの教育を十分に発達させよと云ふ御希望をも承りました、全く自分達がさう云ふお話を承りました上は非常に感激に堪へませぬ所で自分は別段お話もありませぬが、唯感謝するばかりではいけませんから、国に帰つては普通教育を始め実業教育も亦モウ一つの美術音楽も成るだけ実行して御希望に副ふように致します。

夫から先刻石川さんのお話の中に民可使由之、不可使知之と云うと有りました。夫は儒教の孔子様のお話で、支那の政治上にもそれを用いて今迄で行ひましたが、御国も其の影響で、やはり明治維新前迄は其の政策を行ひ、政治上に大害を流しました訳けであります、併し

支那の儒教と言っても……孔子様の儒教でありますから二つはありはしないでありませうけれど、併し唐宋時代以後は儒教でありながら種々に分かれて来たのです。夫は詰り儒教の説を守る人もあるし、守らない人もあつて色々の人が出まして、その儒教の感化は後世に至って絶望した様子でありました。夫から今迄の支那の国家の政策としては此の儒教の影響を受けたのが多いと言ふ御説は成程さうありませうが、併し孔子様が其のお話をするのは決して孔子様の罪ではない、孔子様は時聖と言ふて、其の時に従て適宜のお話をなさる、詰り孔子様の時が今と違って居る、其の時代は封建時代で非常に国に内乱が多かつた時分で彼の民可使由之、不可使知之、彼の一言は何う云ふ方面を指して話しましたのか吾人は解りませぬけれども、併し孔子様の外の話を引いて参考すると、儒教が皆さう云ふ目的であると云ふことはない。決してさうでないです、それを後世の人が誤用して国家の政策にもなり、種々の弊害も出ましたが、併し詰り時が違って其の話だけを利用するのだから、自然に孔子様の主旨に背く結果となつたのであります。

石川さんのお話の知らしむべし、由らしむべからずと云ふお話、詰り知らしむと云ふことは、御国も維新以後から其の方針で旨く政策も行ひましたが、併し全く国民に知らせると云ふことは、今迄で各国も夫程発達して居りませぬ、各国が国民に知らせると云ふ考へは有つて居りませうけれども、今の各国の時勢を觀ますと未だ其の時には全く全部はなつて居りませぬでございます。だから詰り国家の政策は決して人民に全然知らせる訳けには往かないです、孔子様が若し現世に現はれて来ると、やはり昔のことを言はずに、詰り民に知らせると云ふことも賛成であらうと思ひます、孔子様は時に応じて話をするのだから、孔子様は實際の儒者である、孔子様は時の聖と云ふことを昔も言ひましたから、時に応じて話をするのだから、今の世に生まれて来ると昔のことを言はずに現世の最も立派な話もあるであらうと思ひます。又嘗て孟子が梁惠王に謁した時、王が何か我が国に利することがあるかと問れた。孟子は何を好んでも王ばかりでいけない人民と共にで無くてはいかない、何んでも王と人民と共に為なくちやならないと云ふ答でした。夫は其の孟子の言ふことは、詰り梁惠王が何か我が国に利することがあるかと云ふ尋ねに就て、梁惠王の志も能く解つて居る話しである、決して梁王のお尋ねには、梁の国の為でない、梁惠王自身の為に利することがあるかと云ふことで孟子に聞きましたのだから、孟子が何でも民と共にしなくてはならぬと云ふことを説明して居るのです、孟子でも孔子でもやはり道は一つである。時に応じて話をするのだから、決して吾人の批評にはなりませぬでございます。

夫から普通教育に関する話がありますが、普通教育は今支那にはありませぬで、別段話はありませぬが、昔のことを言ひますと、昔の孔子孟子時代には随分普通教育も盛んでありました。其の時の普通教育は歴史の觀察でも直ぐお分かりになるであらうと思ひます。

夫から音楽美術の兩課目は、やはり彼の孔子の時が一番盛んであつて、孔子様は何処に旅行してもやはり樂器を持って歩くと云ふ訳で、門生が沢山ありまして、孔子様の処には何時でも音楽の音が聞えると云ふ事を書いて居ります、其の位い音楽の盛んな時もありました。又其の時には種々の美術品の発達もして居つて、孔子様の論語及び歴史を読むと、其の時の兩課目の発達も分かるであります、夫が段々後世になつて秦漢以後は却つて衰弱になりまして、色々昔にあつたのが絶亡して参りました訳けで、夫れで普通教育も昔の音楽、美術と云ふようなものも今は遺つて居りませぬ。

夫から孔子様の話が後世に段々伝はりませぬで、愈々善い話も無くなつたり、又遺つて居る話も後世学者の誤解で種々国家の弊害にもなる訳けでありました。其の第一理由は、秦の

始皇帝が昔の書籍を全然焼いたと云ふ訳で、其の昔の書籍が遺つて居ない訳であります、だから昔の孔子及び外の人の色々な書籍も色々な話も無くなりまして、其の遺つて居る分だけは今迄の支那の道德主義の發達の根本が遺つて、後は儒教を利用した時代である、兎に角孔子はやはり時に應じて話をする、時を利用して行ふと云ふ目的で、成るだけ時に應じて話をする、行ひをする、だから今後の支那に石川さんのお話の通り何うしても普通教育も、夫れから実業教育、音楽美術及び兵術医術等總ての外国の文明を吸収しなければならぬと云ふ考えであります、其の吸収に就いては少し話もありますが夫れだけに置きます。

外国の文明を吸収するに就いては先刻佐々さんのお話の通り留学生を成るだけ多く外国に出す、夫から青年者を成るだけ自由にさせると云ふことで、さうすると色々な文物も自国に移植して来る訳で、夫は御尤ものお話である、今度政府からの取締規則に就いては、全く不十分のことで、留学生に対しても非常に制限される規則であるとお話であります、併し政府及び本国の教育界の上に立つて居る人達の意見は、決して留学生を是から出さないと云ふ積りでも無い、夫から留学生を格別に制限するでも無い、詰り今迄で色々な留学生がありましたから其の影響で中には善い学生もあるが又悪い学生もありましたので、将来を心配して若し悪い学生が沢山出ましたならば国の為にはならぬと云ふことと、夫からさういふ者が外国に参つても国家の体面上にも関係すると云ふ訳で、凡て學問を習ふに就ては食事をすると同じ事で何の位いの消化力がありましたら何の位い食ふことが出来るかと云ふ訳で、丁度病身で消化力の無い者には食物も食べさせられぬと云ふことで、今清国留学生の多数は外国文明の消化力の少い者少しも自国の學問も出来ず物も識らず、さう云ふ者が、外国に行つて習ふと云ふ訳では、夫が為に外国の文明も學問も何も頭に這入らぬのは無理が無いと思ひます、夫れでさう云ふ留学生が国に返つても決して使はれると云ふ訳には往かないと思ひます、夫故に政府及び教育界の上の人が成るだけ今度留学生は自国で出来るだけ勉強させて成るだけ普通學の修つた人、中学校の學力のある人を外国に出すと云ふ考へであります、さうすると本国の漢學の力もあり、色々な普通の學識もある人が外国に参つた上は十分外国の學問も勉強が出来ると云ふ訳で、夫が為に今度規則を設けましたが、決して學生を制限するのでは無い、此の頃は非常に學生の外出を奨励するです、外国に成るだけ出されるだけ出す積りで、私費でも官費でも夫に拘はらず自由に出させる積りである。さう云ふ訳で唯余り青年の學問の無い人は外国へ出さぬと云ふ考へであるのであります。

夫から先刻儒教に関して、及び今の時勢に利用し時勢に應じて支那に新教育を施すと云ふことに就ては、此の二三ヶ月以来自分の考へて居ることで、或は一冊の著書も出来るだらうと思ひますが、其の著書が出来た以上は皆さんにも御覽を願ひますが、中に間違つて居る所がありましたら何うか十分皆さんの教へをお願いしたいと思います。」(拍手)

黄氏の沈痛なる演説が終わると、石川君が再び起たれた。

石川半山君

「(略)」

黄氏も再び起つて、「今夜は皆さんの御高論を拝聴しまして、非常に光榮に存じます、尚ほ色々他日を期してお互いに話すことの出来る機会を得たいと存じます」と述べられ、最後に本夜相互の演説を通訳せられた、憑氏の挨拶があつた。

3. むすび

牧口が設立した大日本高等女学会は、女子に高等普通教育を行うしかも家庭独習の通信教授の方式をとっていたので、牧口にとって松田女子小学校校長の演説は、必ずしも直接的に関連はしなかったと思われるが、初等普通教育における女子を理解することは、高等普通教育における女子を考える際に、有益であったと思われる。

牧口は『人生地理学』の中で、中国に対し次のような見解を持っていた。清国は我が国と比べると、個人においては実に富みかつ強いが、気力もしくは道徳が欠乏しているので国として纏まらず、国力は我が国に及ばない。国としての纏まりを実現する唯一の方法は、教育の普及と発達である。中国は、自然的要素は備わっているが、それを利用する国民の知力要素や国民団結の気力要素が欠乏しているので、富弱国に属する⁽⁵⁾。しかし遺伝の法則の必然の結果より、将来の運命を左右する最も有力な存在は中国人であると結論を下すことが出来る⁽⁶⁾。

以上のような見解を持った牧口にとって、黄紹箕提学使が演説中で強調した清国における重要課題である教育の普及と発達という部分は、あたかも自説を証明したような内容となっており、極めて印象深く聴講したのではないかと思われる。と同時に、中国人留学生教育に取り組んでいる自身の使命も、再度強く痛感したのではなかろうか。日本側の演説の中では、ややもすれば驕り高ぶったような雰囲気も感じられないわけではないが、牧口の態度は一貫して中国人の存在を極めて高く評価していた。4種類に及ぶ『人生地理学』の中国語版出版が、そのことを証明しているように思える。

黄紹箕提学使が演説中「民可使由之、不可使知之」をとりあげ、国家と国民の関係を論じた。牧口はその点に関しても『人生地理学』の中で自己の見解を述べている。即ち、国家の目的がその国民一人一人の人生の目的と合一する状態を理想的な民主国家のあり方であると⁽⁷⁾。牧口は清国の現状に思いをはせると同時に、自国の現状に対しても憂慮していた。その一つの現れが、大日本高等女学会の設立であった。男子に比べ高等普通教育を受ける機会の少ない女子に、しかも通信教育という方式で同教育を提供していた。また女芸教習所（女性の為の職業訓練所）を慈善事業として附設する事も計画していたのである。

更に黄紹箕提学使が演説中で、佐々講師の演説との関連で「留学生取締規則」について触れた。同規則は1905年11月に文部省が公布したもので、主として表面的には墮落学生を規制することが目的とされたが、実際には留学生の政治活動を取り締まることに本来の狙いがあった。同規則に対して留学生は反対運動を起し、更に一斉帰国運動にまで拡大し、約2000名が帰国している。この運動の中心となったのは、牧口が教鞭をとっていた弘文学院であった⁽⁸⁾。その意味で牧口は、黄紹箕提学使の演説を聴講しながら、日中教育交流の最前線に居る自身を自覚していたのではなかろうか。

(2003年1月15日脱稿)

(注)

- (1) 拙稿「牧口常三郎著『人生地理学』中国語版に関する一考察」(「創価教育研究」創刊号、創価大学創価教育研究センター、2002年3月) 4-10頁。

なお『江蘇師範講義 地理 第7編』は、牧口著『教科日誌(日本地理之部)』、『教科日誌(外国地理之部)』がその基になっているように思われる。「渡米雑誌」第9年第3号(1905年3月3日)に、同牧口著は『人生地理学』の著者が、日本に留学している中国師範学生を対象に実際に教授する便宜の為に著作したもの、と紹介がある。

- (2) 前掲拙稿11-17頁。なお『最新人生地理学』は既に9冊、その所在が確認された。北京師範大学、南京図書館、蘇州大学、浙江省立図書館、復旦大学、中山大学に各1冊、上海図書館に3冊。最近日本語の『人生地理学』1906年版が南京大学で発見されたことも付記しておく。
- (3) 阿部洋『中国の近代教育と明治日本』（福村出版、1990年8月）44-45頁、汪婉『清末中国対日教育視察の研究』（富士ゼロックス小林節太郎記念会、1995年7月）30頁。
- (4) 「教育茶話」「教育界」第6巻第1号（金港堂、1906年11月）51-64頁。
- (5) 牧口常三郎『牧口常三郎全集第二巻 人生地理学（下）』（第三文明社、1996年11月）348-353頁。
- (6) 牧口常三郎 前掲187頁。
- (7) 前掲341-342頁、熊谷一乗『牧口常三郎』（第三文明社、1997年1月）131頁。
- (8) 拙稿「孫中山と中国人留学生——弘文学院を通して——」（「創大中国論集」第4号、2001年3月）47-48頁。